

丸善出版物の歴史

「學鏡」編集室

以下、I 近代化を目指した時代―明治・大正期から戦後復興期、II テイクオフから成長の時代―高度経済成長とオイルショック、III 低成長からマイナス成長の時代―バブル経済とその破綻、苦闘と新たな取組みの時代という三つの時代に分けて小社の出版を振り返ってみたい。

この時代区分は小社の正史『丸善百年史』（以下『百年史』と略）の時代区分とは異なるので以下は小社の見解ではないことをお断りしておく。書かなくてもよいことを書いたり、書くべきことを落としてしまったりと、多々ご批判があるに違いないが、文責は小誌編集室にある。『百年史』には自社刊行物に関するかなりの分量の記載があるものの通史と呼べる解説はないので、今回のわずかなページ数の振り返りでは小社出版の特徴が伝わりやすいと思われる時代区分とした。

以下、その時代を象徴するような自社刊行物、あるいは小社にとってエポックとなった自社刊行物を取り上げながら、小社出版がその時代とどのように関わったのか、ごく簡単に記すことにする。

なお、小社社内では自社刊行物を蔵版と称しているので以

下「蔵版」と記す。ちなみに蔵版とは『広辞苑』によると「版木や紙型を所蔵していること。…転じて、その版木・紙型による権利の意」とある。他社では「蔵版」という呼称は一般的ではないと思われるが、自社刊行物を「手版（手板）」と呼ぶ出版社もあると聞いている。「手版（手板）」も『広辞苑』に載っている。

I 近代化を目指した時代―明治・大正期から戦後復興期

明治期―明治二年（一八六九）～四五年（一九一二）

近代出版の揺籃期で、小社は創業から二年目（明治三年）に初の蔵版（『袖珍薬説』）を出版した。本書は小社単独の出版ではなく山城屋佐兵衛・島村利助・丸屋善七の三社の共同出版で、米国の『ポケット・ドーズ・ブック』（投薬処方）（一八六六年刊行）の翻訳であるが、単なる翻訳ではなく原書は簡略すぎるとして、他の原書五点から処方を用いて訳注として補っている。原書の内容をオリジナルとして執筆する力はないものの、それをそのまま導入するのではなく日本の状況に敵つたものにモディファイするという日本古来の精神は

本書でも脈々と受け継がれていた。

日本の近代詩の単行本の嚆矢とされる『新體詩抄』（明治一五年（一八八二））はよく知られている。『新體詩抄』ほどは知られていないが尾崎行雄が訳述した『公會演説法』（明治一〇年）は彼の一九歳のときの出版で今の一九歳との隔絶に驚くほかはない。英国の“Information for the People”を文部省が訳して『百科全書』として刊行していたものを当時最新の原書五版に基づき新たな訳者で翻訳した丸善版『百科全書』は、予約が千部に達したときに出版するが、満たないときにはとりやめるかもしれないことをあらかじめ断って出したわが国初めての予約出版の試みであった。

このように、明治期は分野は様々なながら時代の要請に応えたテーマを出版した。特定の分野にフォーカスしなかつた背景には、あらゆる分野で近代化が急務であったためと思われる。

大正から戦前・戦中期

— 大正元年（一九一二）～昭和二〇年（一九四五） —

大正から蔵版に理工系出版物が多数を占めるようになった。理工系の中でも化学と建築・土木が多く、次いで電気で、これらの分野が途上国がテイクオフするために必要とされたためと推測される。医学書、薬学書も少数ながら出版していたが、これらも途上国が健康・衛生を改善するために重要であった。

大正時代では関東大震災に触れないわけにはいかない。

『有機製造工業化学』（大正二年～三年発行）は上中下で全二千ページという日本の黎明期の化学工業の全体像を詳らかにした大著で発刊以来好評だったが、大正一二年（一九二三）の関東大震災ですべての紙型を焼失した。そのため重版も改訂もできず、昭和五年（一九三〇）～六年にようやく改めて書き下ろした改訂版を出すことができた。小社社屋が震災で焼失したことによる爪痕の一端が窺われる。

当時は肺結核による死亡率がきわめて高かつたため、肺結核の概念と療養法を正しく理解することを目的にした『通俗結核病論』（大正八年）を刊行した。当時の「通俗」はいまとは異なり「一般向き、誰にも分かりやすい」といういい意味で使われ、書名に「通俗」を冠した本が多数出版された。

昭和一三年（一九三八）頃までは出版用紙は比較的容易に入手できたが、一四年には入手が困難になり一六年には配給制度が敷かれた。その中で小社は申請用紙量のほとんど100%を配給された。たとえば、『大南洋地名辞典』という一～四巻、全二四〇〇ページもの大著が戦時中（昭和一七年～一八年）に刊行されている。本書のような大著の出版は当時は例外で、戦争遂行にはまったく役に立たなかつたと想定されるが、表面的には国策に沿ったものであつたからこそ用紙の配給といえるのではないか。

昭和一八年に出版の承認を受けた『瓦斯分析法』の「序文」には「引続く空襲に勤務先も自宅も爆焼し、全部の原稿と校正刷の前半とを焼いてしまい途方にくれたが、幸いに印刷所

が版組を疎開していくれたので助かった」とあり、空襲が都市を灰燼させた一つの事例が語られている。本書が出版されたのは三年後の昭和二十一年であった。

戦後復興期―昭和二十一年（一九四六）―三〇年（一九五五）

敗戦による物資不足、ハイパーインフレ、外地からの引揚に基づく人口の急増などで戦後の困窮は収まらず出版業界も大きな影響を被った。しかし、昭和二五年に勃発した朝鮮戦争の特需もたらした好況で、出版業界は戦後の混乱を抜け出し小社もまた時代の流れに棹さすように出版活動を活発に行った。

朝鮮戦争特需の一つに土囊、軍服、テントなどの繊維製品があったので繊維産業が活況を呈し「ガチャ万景気」といわれた時代の中で小社では繊維関係の新刊を多数出版した。その中の一つに『実用染色法 浸染編』（昭和二七年）がある。当時の繊維製品には粗悪品が多く輸出市場から悪評が相継いだ。繊維産業の活況という時流に乗ったとはいえ、一方で粗悪品の乱造に歯止めをかけたという危機意識に基づく出版でもあった。

また、この時期になって理工系学協会を編集母体とする便覧などの大部で本格的な出版を手掛けることができるようになった。その中の一つの『化学便覧』（昭和二七年）の「序」に「欧米には信頼性の高い大部のデータブックがあるがわれわれには高価。戦後のわれわれの懐に相応しい便覧とすべく

…」とあり、この序文から、この時期の研究者の思いが伝わってくる。

この時期に『丸善対数表 七桁』『英文法通論』『いかにして問題をとくか』のロングセラーが出ている。関数電卓が普及するまで重版を重ねた『丸善対数表 七桁』は技術者に必携であったし、『英文法通論』も英文法をしつかり学ぶことで英語が上達するかもしれないと藁をもつかむ思いの日本人に訴えた本で時代のニーズに沿っていた。しかし「いかにして問題をとくか」（昭和二九年）は時流に棹さす内容ではなく、「問題の所在を明らかにして、その解決を図る」という普遍的な命題に関わる内容のため初版刊行後六五年経った現在も売れつづけている。

Ⅱ テイクオフから成長の時代―高度経済成長とオイルショック

高度成長期Ⅰ―昭和三〇年（一九六五）―三九年（一九六四）
出版業界は昭和三〇年には戦前の規模に回復し、その後わが国の高度経済成長の波に乗って同等かそれ以上の成長を遂げた。この間の名目GNPは年率一五・五%と凄まじい伸び率を示したが、出版業界の伸び率はそれをわずかに上回り、小社も確実な成長を遂げた。

この間に刊行した蔵版のほとんどが理工系であり、小社はこの頃から理工系出版社と見られるようになった。このような状況下、理工系学協会との関係が一層強くなり、学協会を

編集母体とする刊行物を継続して出版するレールが敷かれた。この時期に日本化学会編の『実験化学講座』（昭和三一年～三四年）という画期的なシリーズを刊行した。本講座は全二六卷（三三冊）をスタートから完結までほぼ毎月刊行した。延べ四百人に上る執筆者は執筆項目に関係する文献をまずは渉獵し、ときには該当の文献に記載されている実験を再試したり、当時国内で入手困難な試薬を合成したりするなど、いまでは考えられない労力を費やした。本講座に大きなエネルギーを注ぐことのできた理由の一つが巻頭言にあり、そこには「戦中・戦後の十数年を、私どもは三猿主義の遵奉に等しい生き方をしてきた。……今ではこれ（実験化学講座）によつて私どもが過去十年余り味わってきた混乱から脱却することができると書かれており、化学の立て直しを自分たちが担うという強い使命感の共有だったのでなかるうか。本講座はその後規模を拡大して現在の第五版に至る記念碑的な一大企画となった。

もう一つ『建築設計資料集成』（全六集）を取り上げたい。『建築設計資料集成 第一集』（昭和三五年）は初版が出たのは昭和一七年（一九四二）で一八年も経つてからの改訂という異例のロングレンジになり、その後もまた『第五集』（『第六集』は昭和四四年刊行）が出て完結するまで一二年を要した。改訂や新刊の刊行に時間がかかったのは、建築技術の金字塔を目指すという野心的な目標を貫いたためと思われる。

この時期の本書の制作は大変であった。執筆者から提供さ

れた青図を縮小した上でトレースして（当時はトレース専門会社があった）印刷に耐える図面とした。図中文字は活版でバラバラに組みそれを清刷にして、その清刷の文字をカットしとピンセットで図面に切り貼りして写真製版した。ほとんどの図面は校正で赤字が入り、上記の作業を数回繰り返してようやく校了となった。

洋書のリプリント版を戦前から手掛けていたが、昭和三五年に“Maruzen Asian Edition”と称するリプリント版を出し、以降昭和五三年まで多数の点数を出版した。

高度成長期Ⅱ―昭和四〇年（一九六五）～四八年（一九七三）
昭和四〇年代も三〇年代にひきつづき四八年一〇月に第一次オイルショックが起こるまで高度成長をつづけた。昭和四〇年から四八年までに名目GNPは三・四倍に伸長し、出版業界も売上が二・八倍に拡大した。

この間、小社の売上也拡大したが、その要因を、一、主力蔵版の続刊および改訂版の刊行、二、基礎医学の翻訳書の刊行、三、新たなシリーズの刊行の三つに分けることができる。このうち大きな割合を占めたのは一で、二は大健闘したものの点数が少なく、三は好調なタイトルから極端に不振なものまで各巻のバラツキが大きかった。

一の代表的な蔵版として『実験化学講座 続』（全一四巻）（昭和三九年～四二年）、『建築設計資料集成』（第四集～第六集）（昭和四〇年～四七年）、『化学便覧』（昭和二七年）を二

つに分けた『化学便覧 応用編』（昭和四〇年）と『化学便覧 基礎編』（昭和四一年）があげられる。『化学便覧 基礎編』は信頼できるデータ集は本書が唯一といって差し支えなかったもので、大学の化学系研究室のすべてに蔵書されていたといっても過言ではなく、さらに多くの高校の理科準備室にも入っていた。

基礎医学の新規翻訳書として『ハーバー・生化学』（昭和四三年）と『医科生理学展望』（昭和四四年、平成二六年から書名を『ギヤノン生理学』に変更）をあげることができ。この二点は頻繁な改訂（二、四四年）、高価格、初版から現在まで部数が落ちないなどの特徴があり、その後小社は多数の基礎医学や臨床医学の蔵版を出版するようになったが、そのさきがけとなった。

新たなシリーズをこの時期に一五点も刊行したが、単発とは違ってシリーズは安定した売上が見込めるといふ長所はあるものの、一方原稿が途切れて継続した刊行ができなかったり、巻ごとの売れ行きに大きな差が生じるなどの欠点があった。おおむね好評であった『経営学全書』（全四〇巻）は七割の巻が重版をしているが、三割は重版にまわらなかつた。

Ⅲ 低成長からマイナス成長の時代―バブル経済とその破綻、苦闘と新たな取組みの時代

オイルショックとその後の回復期

―昭和四九年（一九七四）―昭和六〇年（一九八五）

第一次オイルショックにより翌年（昭和四九年）の実質GNPは戦後初めてマイナス（マイナス一・二％）になったが、名目GNPは一九・三％も伸長し、いかに物価が上昇したかがわかる。出版業界は用紙の不足と価格の高騰に見舞われたが、紙質を落したり定価アップで対処した。定価アップでは奥付を切り替えたり、奥付やカバーの定価表示の個所にシールを貼るなどの応急処置に追われた。しかし、この定価アップが大きな要因で昭和四九年も出版業界は売上を伸ばし（対前一・三倍）、不況知らずの業界ともよばれた。

小社出版もオイルショック後の狂乱物価の対応に苦勞したが売上は伸長した。しかし、その内実はもっぱら『新実験化学講座』（全二巻、三六冊）（昭和五〇年―五三年）、『化学便覧 基礎編 改訂二版』（昭和五〇年）、『化学便覧 改訂三版』（昭和五五年）、『建築設計資料集成（在来版）』（全五巻）（昭和五二年）、『建築設計資料集成（全面改訂版）』（全二集）（昭和五三年―五八年）という旧来の代表的蔵版の改訂によるものであり、新たな企画の寄与は大きくなかつた。なお『建築設計資料集成（在来版）』は昭和三五年から一二年かけて出した『建築設計資料集成』（全六集）のうち一―五集の廉価版のこと。

この期間も新たなシリーズを一三点刊行したが、昭和四〇年から四八年に出したシリーズより総じて振るわなかつた。その中で健闘したのは『基礎生化学実験法』（全六巻）で好評のため昭和六二年に『新基礎生化学実験法』として全面改

訂した。他社からも同じタイトルのシリーズが出るなど、この時代から生化学の発展が著しかったことが窺える。

また、この時期に臨床医学の新刊を出した。『臨床診断と治療 一九七四』は“Current Diagnosis & Treatment”の翻訳で昭和四九年から五三年まで原書出版に合わせて毎年刊行した。また、『最新の外科診断と治療 原書二二版』（昭和五一年）は同じく“Current Surgical Diagnosis & Treatment”の翻訳で本書も原書に合わせて二年ごと出版した。臨床医学への進出という新たな挑戦で意気込みは高く売行きもよかったが、千ページを超える大部な本で、毎年の刊行が厳しく無理をしなくても旧来の代表的蔵版の改訂で十分という見方ももと短期間で潰えてしまった。

臨床医学では昭和五六年に「循環科学」という循環器系医学の月刊誌を創刊した。本誌は平成十一年（一九九九）まで一八年にわたり発行したが、臨床系に弱い小社の体質から部数減に耐え切れなかった。また、昭和六〇年に物理月刊誌「パリテイ」を創刊した。国内で唯一の物理系月刊誌として多くの物理系研究室に常備され大学院生を中心に愛読された。理工系出版社の強みを生かし、本誌を中核として『パリテイ物理学コース』など多数の派生企画が生まれ、いずれも好評であった。しかし、本誌を購入する研究室が漸減するなど本誌をめぐる情勢が厳しさを増して平成三十一年（二〇一九）に休刊を余儀なくされた。

バブル経済期とその後

—昭和六一年（一九八六）—平成八年（一九九六）

バブル経済期と通称される昭和六一年一二月から平成三年二月までの四年余りの間に株や不動産などの資産価格が急上昇し好景気がつづいた。それに伴い生活を脅かす強引な地上げを初め異常ともいえる社会現象が起こった。バブル期の出版業界の書籍の売上は一・三倍であったのに対し出版点数は一・一倍であった。バブル後は平成八年までに書籍の売上は一・一倍、出版点数は一・三倍で、バブル期とその後では売上と出版点数が逆転した。これはバブル後に売上は伸びたものの一点当たりの部数は落ちたことを意味している。

小社はバブル期に商業印刷の注文が殺到したことを理由に頁物印刷を断る印刷所が現れるという想定外の事態に苦慮した。当時の印刷所の社内旅行の多くが海外で、小社との落差に啞然とした記憶がある。しかし、バブル期の一九八九年に創業二〇〇年を迎え、その前後に記念出版として出した『丸善エンサイクロペディアシリーズ』三冊（物理、化学、電気・電子）は四万円弱という高価格にもかかわらず、いずれも早期に重版となった。それほど規模の大きくないある研究所で本書が数冊購入されるなど、いまでは考えられない光景があった。この時期の特筆すべき蔵版に『コンパクト設計資料集 成』（昭和六一年）がある。本書は現在『第三版』が出ているが、建築系の学生の教科書として毎年重版を重ねており、バブルとは無関係のまっとうな出版であった。

バブル崩壊の後、小社は理工系出版社から総合出版社を目指すという旗を掲げて平成三年四月に『丸善ライブラリー』（新書）を同年六月に『丸善ブックス』（選書）を創刊した。当時新書は大手では『岩波新書』『講談社現代新書』『中公新書』くらいしかなく狙いは正鵠を射ていたが、その後の第三次新書ブームや二〇〇〇年前後に一〇点を超える新たな新書が市場に投入され『丸善ライブラリー』は苦戦を強いられた。また、創業一二五周年記念出版として『大百科』（平成七年）を編集・営業総掛かりで刊行した。本書は人文・社会・理工・医学の全分野を包含する文字通りの百科事典であり、理工系出版社から総合出版社へと脱皮するためのメルクマールと位置付けられたが、この年に阪神・淡路大震災とサリン事件という大きな災難が起こり、本書は善戦したものの初版をクリヤーできなかった。

最後に『K-ABC』に言及しておきたい。これは「個別式心理教育アセスメントバッテリー」という「子どもの認知能力と学力の基礎となる習得度を測定するためのキット」で、平成五年から出版し現在は『K-ABC II』という改訂版を出している。小学校をはじめ教育現場に幅広い需要がある。

苦闘の時代―平成九年（一九九七）～平成一九年（二〇〇七）

この一〇年の実質GDPは半数の年でマイナス成長を記録し、ほとんど伸びなかったものの微増となったが、出版業界の売上は二割以上落ちた。一方、書籍の新刊点数は二割弱増

えた。売上が減少する中で新刊点数が増えるのは一点当たりの発行部数が減るだけでなく返品による在庫が増えることを意味した。小社においても在庫は看過できない問題となった。小社ではこの時期に電子出版に取り組んだ。すでに機械設計や化学工学などの計算ソフトを一九九〇年頃から出版していたが、平成八年に『理科年表CD-ROM』を平成一年に『実験化学講座CD-ROM』を出した。前者は大正一四年（一九二五）の創刊以来のデータをすべて搭載し、後者も昭和三十一年の初版以来の全ページが閲覧できるという機能を備えており、使い勝手がよくないCD-ROMであったにもかかわらず好評であった。しかし、一方この時期に出した『化学便覧 応用化学編 第五版』（平成七年）、『建築設計資料集』（平成一三年～一六年）、『第五版 実験化学講座』（平成一五年～一九年）、『化学便覧 基礎編 改訂五版』（平成一六年）の改訂版に以前の勢いがなく、それに代わる新たな取組みが必要となった。

新たな取組みの時代

―平成一九年（二〇〇七）から平成三〇年（二〇一八）

平成三〇年の出版業界は一四年連続のマイナス成長で市場規模はピークを打った平成八年の半分以下に落ち込んだ。

小社においても長い間主力でありつづけた理工系蔵版が振るわず、新たな取組みとして少数数大型事典、医学系、人文・社会系という三点に力を注いだ。これらのうち少数数大

型事典と人文・社会系は出版市場が縮小する中で販路を図書館にフォーカスした。

平成一九年に『生命倫理百科事典』（五分冊、三三〇〇ページ）という少数数で大部な事典を出版した。本書は多くの大学図書館と規模の大きい公共図書館に蔵書され高額であるにもかかわらず重版を重ねた。同様の企画として平成二一年に『ストレス百科事典』、平成二四年に『科学・技術倫理百科事典』、平成二八年に『スクリブナー思想史大事典』、平成三〇年に『統計科学百科事典』を出した。

また、同じく平成一九年に『化学書資料館』と『理科年表WEB版（現在は『理科年表プレミアム』）』を出した。これらは当該サイトにアクセスすると全ページの閲覧およびデータのダウンロードができるというWEBならではの出版で、『化学書資料館』はタイトルの増加、『理科年表プレミアム』は毎年のデータ更新という理由により買切りではなく一年間のアクセス権を購入してもらった新しい試みであった。

基礎医学系としては、以前から出していた『ハーパー生理学』、『ギヤノン生理学』は改訂ごとに部数が大きく落ちることはなく依然として好調をキープし、少し以前に刊行した『トトラ人体解剖生理学』（平成一六年）も改訂を重ね主力蔵版に成長した。さらに『イラストレイテッド免疫学』（平成二一年）初め『リップンコットシリーズ』と謳ったシリーズを七冊刊行した。また、臨床系では『極論で語る循環器内科』（平成二三年）から出し始め現在『極論で語るシリーズ』

として八点刊行しているが、いずれも大変好調で全冊重版を重ねている。また、臨床検査技師のための教本『JAMT技術教本シリーズ』を平成二七年から現在まで十点刊行しているが、本シリーズもいずれも好調といえる。

人文・社会系では平成二一年に『文化人類学事典』を出して以来、社会学、倫理学、心理学、宗教学、地理学など幅広い分野の事典を現在までに三〇数点刊行している。

この間の特記事項として平成二四年（二〇一二）にシュペリンガー・ジャパンが出版していた数学・物理・医学系などの和書四百点弱が小社に譲渡され、これらの分野の蔵版が大きく拡大したことをあげておく。

最後に電子書籍に触れる。丸善雄松堂のプラットフォームである機関向けの電子書籍閲覧サービスのMEL (Maruzen eBook Library) や、大学生協・医療者向けの電子書籍販売サイトなどを通して蔵版を販売しており、そのタイトルは年々増えて売上も伸長している。これらの取組みは小社を支える太い柱となり、さらに成長しているが、飛躍するためのエンジンまでには至っていない。小社には新たなエンジンが必要とされることを記して、振り返りの締めくくりとしたい。